



Special Edition
地域の魅力
再発見企画

かつて天王元宿（第5区）地域に存在したといわれる「しの笛」のお囃子。今では、聞くことができなくなってしまった伝統の旋律といえます。天王元宿祇園囃子を守る会では、しの笛の旋律をもう一度復活させようと、子どもから大人まで稽古に励んでいます。今回の特集では、関係者への取材を通して、郷土芸能の価値と守り伝えていく人たちの想いに迫ります。

継承者たち 郷土芸能の

特集
地域の誇りと
伝統の旋律を心に刻む



忘れ去られていた旋律を取り戻す。
次の世代の子どもたちのために。
地域の誇りとして—。

人にやさしい行政を

今年も、やささと活気の調和したまち“おうら”にこだわります。



金子正一 町長

かねこ まさかず ● 1942年生まれ。町政に対する姿勢は、「真面目にまっすぐに町づくり」。趣味は、ウォーキングなど。

町民のみなさん、新年あけましておめでとうございます。2013年の新春を健やかに迎えのことと心からお慶び申し上げます。また、日ごろから、町づくりへの温かいご支援、ご協力に深く感謝申し上げます。

堅実な財政運営を目指して

昨年は最優先課題を見つけ、緊急性と必要性があるものを中心に、事業を展開してきました。邑楽町公民館と町民体育館、武道館の耐震補強・改修工事などを実施。老朽化した石打町営住宅の建て替え工事にも着手しました。邑楽町地域防災計画の見直しや防災行政無線の整備にも着手したところです。今後は、教育施設の改築工事なども視野に入れて、事業を進める予定です。

子どもやお年寄りの健康を大切に、まちの支援

少子化対策、高齢者対策などは重要な問題です。限られた予算の中でも福祉サービスの充実を図ることが、人にやさしい町づくりの基本と考えま

す。子育て世代を支援するため、15歳までの医療費の無料化は今後も継続していきます。また、町の高齢化率は約23%と、本格的な高齢社会を迎える深刻な段階に入りました。在宅介護をしている人の支援や施設サービスの

町民の皆さんがこの町に住んでよかったと思える行政施策を—。

拡充など、可能な限り支援していきたいと思います。

いきいきと暮らすためにも、健康は大切です。保健センターや町内の医療機関などと連携して、町民の皆さんの健診や健康管理の支援も進めていく考えです。

より多くの魅力を発信する

役場庁舎の窓辺に立つと、おうら中央公園やすらぎの池に白鳥を眺めるこ

とができます。ここ邑楽町は、寒風吹きすさぶ季節になると、遠くシベリアから白鳥が数多く飛来し、その翼を休める場所です。多々良沼やガバ沼などでも数多く観察することができます。シンボルタワー「未来MiRAi（みらいみらい）」からは、赤城・榛名・妙義の上毛三山を望み、晴れた日には関東平野はもとより、遠く富士山や筑波山まで一望できます。

また、昔から粉食文化が根づいている邑楽町では、数多くのそば店がしのぎを削っています。町内そば店の有志が結成した「そばの町おうら会」では、「そばの町おうら」をPRし、地域産業の活性化を目指しています。

着実に歩を進める一年に

何より住んでよかったと思える町づくりのため、今年も全力で町政運営に臨んでいく所存です。結びに、本年が町民のみなさんにとって、健康でよりよい年となりますよう祈念しまして、私の新年のあいさつといたします。



天王元宿祇園囃子を守る会
代表 竹内英之さん

無形なものを郷土愛 という形に変えて この地に根づかせたい

天王元宿祇園囃子を守る会は、平成10年4月に発足。地元の子どもたちに祇園太鼓の技を継承するために活動してきました。その後、邑楽町伝統文化掘り起こし協会主宰の渡辺幾雄さんの勧めもあり、しの笛も取り入れた本来の祇園囃子を完成させようと、平成23年11月の秋から本格的にしの笛の稽古も始めました。子どもから大人まで、しの笛や祇園太鼓の習熟に励んでいます。

「幼いころは夏になると、どこからともなく聞こえてくる祇園太鼓の音色に、お祭りの季節がやって来た」と胸を踊らせた音色を忘れることができません」と語るのは、天王元宿祇園囃子を守る会の代表を務める、竹内英之さん。

「次の世代に伝統ある郷土芸能として残したいと思う気持ちには当然ありますが、祇園囃子の継承は、譜面や書面などがあるわけではなく、口伝で行われます。曖昧な部分も多くあります。伝統の範囲内で無形な部分をなるべく有形なものとしていき、未永く定着させ、継承していきたいという衆しみがあると思います」と竹内さんは古里の伝統芸能の伝承に情熱を注ぐその原動力について語ります。

「もう一つは、それにきちんと答えてきてくれる子どもたちの笑顔もまた楽しみのひとつだと思えます。しの笛の演奏も何とかな形になってきました。あとは祇園太鼓と音を合わせて、曲として完成できるかが課題。一つひとつの課題をクリアしながら、八坂神社の夏祭りや、おうら祭りなどで披露したいですね」

古里の伝統芸能を愛し、次の世代へと継承を願う竹内さんは、会の仲間とともに伝統の旋律を奏で続けていきます。

天王元宿の祇園囃子は、太田市沖之郷町（三耕地）から江戸時代末期～明治時代初期に伝承。そのときには「しの笛」演奏もあったようですが、いつしか「しの笛」抜きに祇園囃子になったようです。天王元宿祇園囃子を守る会では、この失われた旋律を取り戻すために、2011年の11月から「しの笛」の稽古に励んでいます。

しの笛は、調子（1茶～12茶）※の種類や息・指の使い方によって音色が変化します

※しの笛は種類により1～12茶調子などと呼ばれ、1茶調子が一番太く長い。

↑「口ささり採譜表」は、渡辺さんが考案したもので、音符が読めない人でも、しの笛を演奏できるように書かれています



心の深淵に響く旋律

天王元宿祇園囃子のルーツ

祇園囃子の起源は京都にあった。その旋律は永い年月を経て邑楽の地へと伝承された。

「京都の東山区祇園町に鎮座している八坂神社は、全国にある八坂神社の総本社。そこで行われる祭礼のとき演奏されたお祭り囃子を、祇園囃子といいます。その祇園囃子が、全国各地の八坂神社のある地域に伝えられたのです。地域、地区により曲調や曲目、楽器構成は時代の変遷により異なります」と教えてくれたのは、邑楽町伝統文化掘り起こし協会の主宰している渡辺幾雄さん。

天王元宿に伝わる祇園囃子の起源については、「諸説ありますが、江戸時代の末期から明治時代初期にかけて、今の太田市沖之郷町から伝承されたものといわれています」と話してくれました。

京都から永い年月をかけて伝承された祇園囃子。邑楽町周辺で演奏される

地域の強いつながりと郷土芸能の伝承とは、表裏一体だと思えます

祇園囃子のルーツとは

邑楽町伝統文化掘り起こし協会 主宰 渡辺幾雄さん

れる祇園囃子は地域性や曲目により、軽快な旋律だといわれています。取り戻された伝統の旋律

「天王元宿祇園囃子を守る会の皆さんの熱意と、子どもたちの真剣に取り組む姿勢が、しの笛復活に結びつきました。本当に難しいお囃子だったので、素晴らしいチームワークとやる気です。予定より1か月早く形になったことが、本当にうれし」と渡辺さんは顔をほころばせました。

「今ある数々の郷土芸能は、先人たちの英知と研鑽により築き上げられ、連綿と伝承され、地域に根づいてきました。そこには、出会い・ふれあい、連帯感・共同体としての意識も生まれ、郷土芸能はこうした地域の活性化の潤滑油としての役割を果たしたのです」

最後に渡辺さんは言います。「郷土芸能の伝承と地域のつながりの強さは、表裏一体といえるかもしれません」と。

↑しの笛と祇園太鼓の音色をひとつにするのは難しく、演奏の課題になっています

giondaiko 祇園太鼓

祇園囃子になくはならない太鼓。大鼓（おおど）と締太鼓（しめだいこ）で編成されています。このほか、鉦（かね）やチャップパという楽器を使います。

大鼓（おおど） 締太鼓（しめだいこ）





Masahiro Kojima
天王元宿育成会
小島正宏さん

子どもたちには地域の 大切さを知ってほしい

「子どもたちには地域の大切さを知ってほしい」と小島さんは語ります。子どもたちには地域の大切さを知ってほしいと語ります。子どもたちには地域の大切さを知ってほしいと語ります。

「子どもたちには地域の大切さを知ってほしい」と小島さんは語ります。子どもたちには地域の大切さを知ってほしいと語ります。子どもたちには地域の大切さを知ってほしいと語ります。

「子どもたちには地域の大切さを知ってほしい」と小島さんは語ります。子どもたちには地域の大切さを知ってほしいと語ります。子どもたちには地域の大切さを知ってほしいと語ります。

「子どもたちには地域の大切さを知ってほしい」と小島さんは語ります。子どもたちには地域の大切さを知ってほしいと語ります。子どもたちには地域の大切さを知ってほしいと語ります。

「子どもたちには地域の大切さを知ってほしい」と小島さんは語ります。子どもたちには地域の大切さを知ってほしいと語ります。子どもたちには地域の大切さを知ってほしいと語ります。



↑どうしたらよい音色が出せるか、子どもたちは自分たちで考え、意見を出し合いながら稽古しています



←子どもから大人まで、演奏にも熱が入っています

地域の誇りとして、受け継いでほしい

天王元宿区長 齋藤金男さん
永い間、私たちの地区で受け継がれてきた祇園囃子。しの笛も加わり、本来の祇園囃子が完成したことは本当に素晴らしいことです。天王元宿祇園囃子を守る会の取り組みが実を結び、子どもたちが稽古に励んだ結果にほかにありません。地域の誇りとして大切に代々受け継いでほしいと願います。



Kino Saito

地域の魅力 再発見

取材を終えて

Report

地域の誇りを引き継ぐ「たすきリレー」

天王元宿祇園囃子を守る会の方々に、今回の特集では、地域に受け継がれてきた郷土芸能の価値、それを守り続ける地元の人たちの想いに迫りました。関係者の皆さんへの取材を通して見えてきたもの、それは世代を超えて結ばれた地域の強い「絆」でした。郷土芸能の価値は、それを受け継いでいく地域の人の強い絆を育むことにあります。天王元宿祇園囃子を守る会の皆さんは、子どもと大人が一緒になって稽古に励んでいます。「子どもたちは、郷土芸能にまっすぐな眼差しを向けてくれます」と竹内代表は語ります。郷土に残る伝統芸能を守ることが、大人から子どもへと地域の誇りを引き継いでいく「たすきリレー」なのかもしれません。

受け継ぐ地域の誇り



子どもたちの手へと、ゆだねられた地域の宝がそこにはあった――。

天王元宿祇園囃子の継承者たち



もっと上達して、今度は教えてあげたい
小島 涼さん (中学1年生) *Suzuka Kojima*
しの笛を学んでいますが、音色をきれいにし出すのがとても難しいと思います。これからもしの笛は続けたいです。もっと稽古して、地区の小さい子たちにぜひ教えてあげたいです。



生まれ育ったこの地区が大好きです
磯 美貴菜さん (中学1年生) *Mikina Iso*
しの笛は、息づかいがとても難しく、途中中曲のテンポが変わるので、速さについていけないときがあります。この地域が大好きなので、これからもしの笛は続けていきたいです。



指使いが難しいですが、早く上達したい
小島 可楠さん (中学1年生) *Kana Kojima*
しの笛の難しいところは、独特の指使い。今は悪戦苦闘しながら曲を覚えています。学校の勉強と部活で大変なときもありますが、もっと上達して地区の小さな子たちにも教えたいです。